

知の現場 久恒啓一・監修



創造的な仕事を進めるにはどうしたらいいのか。

各界で活躍する21人を「知の巨人」と位置づけ、それぞれの「知の現場」を訪れ、ヒントを探ろうというのが本書だ。書齋派、フィールド派、出会い派など4つのジャンルに分け、白洲次郎の作品で知られる作家、北康利氏▷「アイデアは散歩、酒場、鉄道から」と説く作家の野村正樹氏▷ライフハックの分野で人気の小山龍介氏▷公認会計士で作家の山田真哉氏一らを紹介している。

取材・編集は「知的生産の技術研究会(知研)」のスタッフだ。梅棹忠夫氏の名著『知的生産の技術』に触発され、設立した団体で、今年設立40周年。その節目にふさわしい知的刺激あふれる書物となっている。

▷1680円、東洋経済新報社

鑑真 東野治之・著



知っているようで実はあまり知られていない、高僧・鑑真の実像と生涯に迫った決定版。

鑑真といえば渡航の苦勞談ばかりが有名だが、そもそも伝えようとした戒律とは何か？ 国際感覚に優れた文化人でもあったという鑑真が抱いた来日の大きな目的とは？

その生い立ちから学問、思想まで、唐時代にスポットをあてながらそんな疑問に明解に答えてくれる。

なかでも、聖徳太子が中国高僧の生まれ変わり(けいぎ)と信じたことや長屋王の袈裟のエピソードなど、資料の丹念な検証と鋭い解説は秀逸。

失明してさえ揺らがなかった強い信念や使命感のわけも、著者がいうように古代の人の気持ちになれば理解できるような気がするのである。

▷756円、岩波新書

随筆集 一私小説書きの弁 西村賢太・著



貧困や鬱屈が充満する独特の私小説を発表し、東京・芝公園で「のたれ死に」した大正期の作家、藤澤清造。近年この名は、平成の世に突如現れた破滅型私小説家で、「歿後弟子」を自任する著者によって、徐々に知られるようになった。

2度芥川賞候補ともなった著者は、藤澤全集の個人編集も進めており、その激烈な私小説の中で、主人公に繰り返す強い共感を語らせてきた。初の随筆集となる本書には、同人誌、文芸誌などに寄せた短文38編が収録されているが、文章にこびりついた「師、への傾注にはただ圧倒される。「悲惨だが滑稽、野暮なんだがスタイリスト」との評に出くわすと、刊行準備中の「全集」への期待がふくらむ。

▷1680円、講談社

作家・藤澤清造に傾注した結晶

言葉ふる森 山と溪谷社・編



古井由吉、篠田節子、佐伯一麦ら29人の作家による「山」をテーマにしたアンソロジー。

マタギとともに山を駆けめぐったことのある熊谷達也の実感がこもった「山が持つ二つの貌」。知床の森と海に30年ほど通い続け、自然や動物への愛情がにじみ出た立松和平の「知床の森のクマ」。山登りしないという小池昌代の「山が呼ぶとき」は、知り合いの山男が語った「夜の山」から「死の誘惑」をかぎ取る象徴的な文章。

山と自然を愉しむ月刊誌「山と溪谷」に掲載された作家のリレーエッセーを中心にまとめた。純文学、詩人、児童文学まで幅広いジャンルの作家の心に響く随筆。登山愛好家だけではなく、一般読者も満足させる一冊。

▷1575円、山と溪谷社

多ジャンルの作家が見た「山」

21人の「創造力」源泉を探る